

〈平成20年度最終講義〉

PISA 型国際学力テストへのもう一つの見方

——質的研究法の立場から——

平 山 満 義

PISA 型国際学力テストへのもう一つの見方

——質的研究法の立場から——

平山満義

先ほどは手打学系長から丁寧にご案内がありました。それに私への紹介として吉江先生からも丁寧な挨拶を預かりまして大変嬉しく思います。それでは、さきほど司会からご案内がありましたように、本日付けの「最終講義」ということで、このテーマでお話をさせて頂きたいと思います。当初は、先ほどの話にもありましたように、こちら（注：「質的研究法による教師効果研究」）をやりようと思ったんですけども、この時はあまり時間がなくて中身まで話せなかった、できなかったんですね。それで、仮のテーマとして挙げたんですけど、実質的にはこういう形になったということです。じゃあ、これから約1時間弱に渡って、今日がわたしの最後の授業ということで、少し喋らせていただきたいと思います。

皆様方ご存じの通り PISA 型国際学力テストというのは、既に2000年から始まって、2015年まで長期間に渡って行われるんですけど、毎年じゃなくて、3年毎に行われるということで、すでに3回目が終わったんですね。2006年ですか、それで2009年の、今年ですけども、まもなく始まるんじゃないかと思うんです。そういう形で、皆様ご存知かと思いますが、この PISA 型国際学力テストというのは、世界の教育にかなりの影響を与えているのはご承知だと思います。それで、我が国はこれに向けて世界の先陣を切りたいということで、頑張っているんですが、その望みとは逆行した形で、残念ながら、あまり奮ってないのが現状のようです。

では、その PISA 型学力テストがどうい

うのか、そんなに大事にしくちゃいけないものなのかどうか、このテストの何が大事なのか、ということについてのチェックをしたいと思っています。まあ、わたしが知っている範囲です。教育系の論文が中心となりますが、これに加えて教育関係の色々な報告があるんですけど、そちらの方にも少し目を配ってみると、私が今これからやりようすることについての内容については、あまり触れられていないという印象を持ちました。それで、「質的研究法の立場から」という、分かったようで分からないような曖昧な表現ですけども、1つの見方ということでね、つまり質的研究の立場から探っていた時に、どんな風な PISA 型学力テストが、我々の目の前に立ち塞がっているのかということをごここで明らかにしたいということです。

方法としては、お配りした資料の題名の下に書いてありますけども、ドキュメンタリー・フィールド・リサーチという、つまり学校を中心にした資料によるフィールド調査をするわけです。まあ、ドキュメンタリー・フィールドというのは、これは私が勝手に付けた名前ですが、これがどこまで広く拡がっているかどうか分かりませんが、文章上の仮想フィールドの中で、可視化してみようという意味のことで、「それって文献解釈と同じじゃないの」と、言われてみればこれもそうなんですけれども、ちょっとこの言葉に何と言いますか、こだわってみて、そこからもう少し深入りしてみたいな、という意図の含んだ状態のものです。前置きがかなり長くなりましたけども、それでは、本題の方に入っていきます。

ところで、皆様方ご存知かと思いますが、

過去のこのテスト、つまり PISA テストにおける成績結果を見ますと、そのトップの席についた国が意外にも、遠い北欧のフィンランドであるということです。これを一口で言いますと、結果はその国の教師力にあると言いきっていいであろうと思っています。で、この教師力というのは、我が国も今問われている重要な課題となっていますね。現在、これについては色々な議論を起していますが、今までは学習者にその責任を転嫁する論が主として展開されていたんですけども、最近では、教師の方に視線が集まり、まあ注目するというか、教師の方に目が移ってきている。それで、いろんな角度からそのチェックを彼らは受けているということで、これはこれでその見直しの契機の1つになるんじゃないかなと思いますけどね。

ここで、この教師力に関して、フィンランドの教師ってというのは、どういう理想と形態で指導を展開しているのかということを考えてみたい。また、その背景にある政府のここへの関わりも、調べてみたい、と思う。つまり、行政側は、先生方に対してどういう関わり方をしているのか、ということです。この2つの分析を、1つの視座にまとめて考えてみようということです。

まあ、我が国の場合ですけども、ご存じかと思いますが明治時代から「教育は身を立るの財本」と言われておまして、教育こそが国を興す重要な要因だとしてその当時から政府は教育を重視した。これは、人間が一生を送るのには教育こそが極めて大事だ、という理念ですね。一方、向こうっていう国は外国でのフィンランドの話ですけども、ご存じかと思いますが、この国の教育が世界の中で今最も高い注目を浴びるほどの優れた指導を行っているのです。まあ、これは後でもう少し詳しく話しますが、ご存じのようにこのフィンランドはスウェーデンと対峙し、北欧の海に囲まれた島国ですが、このスウェーデンから長い間植民地に近い屈辱的な支配を受けてきた。やがて、世界に民主化のうねりが大きくなるにつれ、フィンランドはこのスウェーデンの支配から解放され、新しい時代の

到来を迎えた。これで安堵の息を吸えるかと思いきや、今度は反対側に位置するロシアの占領下におかれて、その後、長い間辛い時代を送るという、おぞましい歴史を持っているのです。

そういう経過を辿ってきた国ですけれども、ひとえにそうした結果を生んだ原因は何かと言うと、国民が自国の歴史についてよくその事情を知らない、知ろうとしない、知らせられない、の3つにあるんですね。要するに、北欧の地という過疎的な位置と氷河の跡を色濃く残す厳しい地形から国自体がのんびりムードで暮らしてきた歴史（注：隣国間の小さな争いはしばしばあり）を持ち、しかも外圧（注：隣国を除く）に対して無知に近い状態に置かれ、世界の新しい流れを取り込む意欲が乏しかったということです。

それでフィンランドは広い世界を意識したとき、これではいけないと反省し、国としてこの状態から脱却するためにはどうしたらよいかについて、各方面から知恵を集め、集約整理した。その結果、世界に広く目を向けさせ、国民に新しく多様な知恵を授け、それを身につけ行動させること、要するに教育ですね、これこそが、国を解放する有力な手段であり、それが結果的に国力を高める有効な方法であることに、彼等は気付いたわけですね。何か、明治以降の日本の歴史の動きに似ていますね。それで、フィンランドは学校教育の方に、国が持つ人的・物的資源といった大きな力を振り向けて、国全体を挙げて教育を核とした国力の強化のためにエネルギーを振り向けるようになったということです。

我が国だってね、そうでしょう。明治政府によって発布された「被仰出書」の中で、「学問は身を立るの財本」と言っていますね。同じように、まあ歴史・時代は違ってもね、「資源もない、（注：系統だった）学問研究もない」という貧しい歴史を持つ我が国でしたから、教育をベースにして日本を造っていかなくてはならないという点では、（注：とりわけ、明治以降において）時代を超えて言える共通の歩みであった、と捉えても良いでしょう。当然、我が国のこの

点の気づきと実行は、世界の中でも、相当早かった部類に入りますね。これは我が国の歴史に鑑みても、資源の少ない我が国の世界における国力の上昇に大きく貢献した特筆すべき政策と捉えることができますね。こうして歴史を簡便に振り返っても、国力にとって教育がいかに大切か、そして、その力が我々の暮らしに発揮する素晴らしさをここで皆さんと共に再確認したいですね。

繰り返しになりますが、特に明治政府が重要な国策として学校教育の導入を図り、明治初期に西洋人を東京（江戸）に招き、西洋式の近代的教授法による指導をし、西洋文化を我が国に導入する基盤整備の導入が始まったことも、日本教育史などで学んだことでしょう。より具体的には、日本の生活と文化の西洋式近代化と学問導入による多くの知識人の育成による国作りのために、西洋式の学校教育体制の早期導入を図り、全国津々浦々にわたる学校教育体制の構築を実現したことが今日の近代的日本の国作りの基礎となったことはよく知られている事実ですね。こうしてみると、教育はやはり人間の営みの中で、食に次いで大事なのがわかりますね。この人作りがいい加減だと国の破綻へと導くことになりますね。

ところで、話はかなり飛び、脱線します。第1の問題は、この人作りに関わる「教師力」なんです。これが現在問われているなかで、国策レベル級の大きな課題となりつつあります。数年前までは、国際学力テストがとても重要となり、その成績を押し上げる教師の資格と条件とかね、あるいは、教師の指導力における自主性とか主体性をどう尊重するのか、ということでの教師側の対応の問題ですね。2番目は、先生の資質の問題です。教師側に対する一般の人達は、現在どのような目で見ていいのか、社会的な地位として見た時、教師の地位はどうか、というような点ですね。そういうことも見てみたいですね。それから、そういう先生達に対する社会的な期待に対して教師自身はどう応えようとしているのか、その姿勢と結果は現在どうなのかということもちょっと探ってみたいです

ね。これらの課題は、ここで扱うより深いレベルで考察している事例が沢山ありますので、関心を持つ方は自分自身で探ってみましょう。

話がまた、あちこちに行っちゃいますけども、そのフィンランドの話しに入る前に、何が問題かと言うと、さきほどの国際学力テスト話に関わりまして、我が国の場合の主な報道が次のようなものであったということですね。1つは、PISA 型テストの結果が、まあ、教科別、あるいはジャンル別と言ってもいいですけど、国家間の成績順位報告とその原因追求の2つであったと言っていいですね。つまり、国と国との競争ではないんですけども、それに近い様な目で、どの国の国民も PISA 型テストを見つめている。特にアジア圏ではその傾向が非常に強い、日本はその中でも最も強い方に入るかもしれません。私は次のいずれの国にも訪れたことがないですが、たとえば、お隣の韓国なども彼らとの茶飲み話によれば、そのようです。台湾もそういう感じらしいです（これは又聞きです）。一方、当事国のフィンランドではどうかというと、国民の反応はこの点では意外とサバサバとして、まるで関係ないような表情であっけらかんとしていた印象でした。

私自身がそんな国を扱うために行ったのかというと、僅か1週間ですが滞在しました。その時はもうその問題の影が薄くなりつつあり、しかも、スウェーデンが調査対象の中心だったので、隣の国にちょっと寄ってみようかという形で訪れた時の印象です。フィンランドは、我が国と比べ地域社会のまとまりがかなりいいな、そして、コミュニティもよくできているなっていう感じがいたしました。その時は住民が手を結び合ってね、街の問題を解決する雰囲気でしたね。では、学校教育の世界はどうかって言うと、先生方の、何て言いますかね、指導が日本とかなり違うなって印象を受けたんです。それは何かって言うと、あとでもっと詳しく話しますが、子ども達を自由にさせるって言いますかね、伸び伸びとさせる、といった印象でした。

それとは対照的に、日本の教育のスタイルっていうのは、先生中心で動くんですけど、私が

見たときの授業運営の印象は、生徒達が与えられた課題を果たすために、のびのびと自由闊達に動いており、問題があればそれを先生がコントロールしていくという高原の牛追い姿勢のイメージでした。考えてみればこちらの方が指導としては難しいですね。子ども達が自由に動いていくのを看取って、もし問題があれば先生が最小限の手助けでうまく使い回ししていく。これは指導法としては高等な技術と言いますか、その経験を工夫しながらの改善策をもつこととその問題点の背景を読み解ける考察力がないといけませんね。つまり、一人一人の子どもの現在はどういう状態かについて、先生自身が随時個人別に掘んでいないと、こういう肌理の細かいテクニックは使えないわけで、そういう意味ではフィンランドの先生方の指導力は素晴らしいのかもしれない。我が国よりも学習者の自主性を大切にするとする指導姿勢においては前を進んでいるなという印象を、強く持ちました。そういう国です。

それからもう1つは、生活上からみても非常に印象の良い国でした、あそこは。例えば、何て言いますか、何かちょっと挨拶をしても非常に明るい声で返してくれるって言いますか。特に若い女性なんかはね、私のようにちょっと困った様子を見せる外国人の姿を見るとね、すぐ声を掛け、手を差し伸べてくれる、そういうお国柄でした。それも過去の時代に、スウェーデンなど隣国からの辛い支配を受けたという歴史もあってか、外国人を大事にするっていう姿勢があるんでしょうね。そんな良い印象を持った国でした。

ところで話を元に戻しますけども、そうですね、フィンランドは国別レベルの学校成績が高い結果を残しているの、そちらについて注意が向いてしまうんですけど、ここで扱っているような報告レベルが大半で、この点に集中した詳細な研究または報告は、今までなされてこなかった。それでも、最近ね、あちこちから、これに近づこうとする研究報告が様々な方面からちらほらと出始めている状況にあるんじゃないかな、ということです。つまり、成績の方にば

かり目が注がれ、その中身があまり知られてなかったのではないかとことです。それで、私はこれについて、少しばかりお話をしましょうということです。

皆様方の多くが既にご存知かと思うんですけど、確認のために言いますとね。一般的には学力、態度、能力の3つの分野でテストをしているわけです。それも順位（個人別での）争いのね、ですからそのデータしかほとんど出てないというのが日本の実情ですね。どうしてこちらの方が目にいくのかということなんですけどね。これ自体は決して良いことではないんだが、また、悪いとも言えないんだけど、その順位争いのお話よりも、何故フィンランドが注目されねばならなかったのかということの原因、こちらの方を尋ねる方が我が国の教育の将来のあり方として参考になるだろうし、重要だろうということです。順位争いは、反復練習すればかなりの問題解決に近づくので与しやすいのですけれども、フィンランドの場合は、日本のように反復練習しなくても普段の結果が出てくるというものですから、ちょっと比較する際にはお門違いだろうという印象を持ったので、この差異を意識してこれからお話をするわけです。

で、これからの話は、あくまでもその基礎となる、最初のテスト結果についての確認です。2000年のテスト結果が2～3年経ってから今日の報道機関に公開され、伝わってきたわけですけども、その中身は当事国を基準にして（たとえば、我が国とフィンランドといった）国家間の順位争いとしてやっていたわけですね。それが、段々とね、フィンランドがどういう国だという点を知るにつれて、その国の教育の組織と体制に関心を持ち始めてきて、何で遠い北欧のあの小国がこういう形式のテストであればほど良い結果を収めたのかと不思議がった。その辺の素朴な疑問が端緒となり、主として教育関係組織の各方面から様々な疑問が出始めてきてね、フィンランドのその秘密を明かそうという調査や研究が、とりわけ日本では異常といえる程に出してきたわけですね。それは、私も非常にいい

傾向であるというように理解しております。でも、そのあとが問題になるわけですけどね。

そうですね、例えばこれも、あの当時の我が国の新聞をサンプリングして目立つものだけを取り上げたものですけど、全般を紹介しようと時間が無くなりますので、例えば産経新聞の12月5日付ですか。ここに出ていますけども、こんな風な見出しですが、その中身だけにします。「活用力を上げるには基礎基本の知識が必要」だとして、「授業時間とか学習内容を削減した現行の学習指導要領が影響していたことを事実上認めた」というのが、記事内容ですね。それから、「G8などの先進国ではいずれも順位が低い」、「日本としては先進国に追い付け追い越せといつかつての猛勉強型を再現するというよりも、フロントランナーとしてどういう独自の方法で子ども達に理数系への意欲を持たせられるか国民全体で考えていくことが重要であろう」と、こういうような内容で紹介しているものもありました。

というようなことで、どちらかという、成績順位が先になってその後で学習意欲の問題とか、教師の指導の姿勢、対応の仕方というようなことについてね、徐々に報道が出ていくわけですけど、当初これが中心でした。で、今でもなお、どうしてこういう順位に飽くことなく拘るのか、このフィンランドがなぜ注目されるべきなのか、という教育の本質となる学力の質の解明が、報道機関ではあまりなされていない。それでは、「教育関係者ならどうなのか」というと、これも私の耳目に入った範囲内では、私がこれまで話したことの範囲プラスアルファぐらいでしか、捕まえていないというような印象を持っています。そこで、ここではそれについてもう少し掘り下げて考えてみようということです。

じゃあ外国ではどうか。日本だけがそういう報道をしたのかというとそうではなくて、外国でも次のような採り上げ方をしています。例えばロンドンですか、経済雑誌「エコノミスト」の中で、その結果のデータを挙げて、次のようにコメントしている。一部引用します。「ドイツ

の成績の学校間の格差は大きい」と。これはドイツではほとんどの学校が児童を地域で選んでいるので、その地域格差が予想された通りに成績結果に現れている。ということで、日本の報道よりは、まあエコノミストという雑誌のせいもあるんでしょうけど、一層中身に立ち入った分析をしているんですよ。ドイツの学校間の分散は大きい、ということですが、まあ、エリート校と、そうじゃない学校というのがきちんと分かれているようなので、そのため、こういう結果を生んでいるんでしょうけどね。

ところがあとで分かりますけど、この目で見ていくとフィンランドというのはどうかと言うと、学校間の分散は逆に小さいんです。でも学校内の分散は逆に大きいんですね。ということは校内での散らばりの幅は大きいんですね。成績の低い人から高い人までの差異が大きい学級集団だということです。ところが学校間の差は、A校とB校っていうのはだいたい同じレベルであると。それも平均的にね。そういうようなことで、ドイツの事例とは大きく違うということですね。では日本はどうかと言うと、どちらかと言うとドイツ型に近いんですよ、例えば有名校、そして、そうじゃない一般校があるんですが、次の段落で分かるようにそういうような形になっているからです。ご承知のように、受験勉強の結果ということで繰り返しますから、結果的にそうなることだと思いますけどね。

今の分散の話を2つの視点から見たんですけど、これがねPISA型テストとどういう関係があるのかということが、後で段々分かってくるんですけど、問題はドイツ、そして、日本が入ってきてね、それからイタリアも入ってくる。この中にご存じの方もいらっしゃると思いますが、なんだか日独伊の三国同盟をやっているみたいなんですけどね。そういうような結果が出てきて、世界ではこの3国を中心にして、一部の学校は、今なおエリート校、そうじゃない学校と分けてしまって、やっているようです。その結果、片方の学校が足を引っ張ると、もう一方は、与えられたレールっていうものがある、その上に乗って動いているという形ですの

で、その上に当てはまった問題であれば、素晴らしい結果を取めるんでしょうけども、残念ながら PISA 型が求めている学力像というのはあとで話しますけども、これとはかなりズレているんです。つまり、そういう学力ではないんですよ。従ってこのドイツ、日本、イタリアなどの3国が中心になっている学校の在り方というのは、PISA 型学力の理想像からすると、大きくズレ込んでいる、離れている、と言えますね。その結果、これらの国の成績は下位の方に移っているという理由の1つがここにあると、いうことです。

あれこれ話しましたけども、それが今、2番目のところで話した内容を一部含んだ3番目のところに相当するわけです。成績に関する学校間の分散の大きい順にいうと、ドイツ、オランダ、日本、イタリア。そうですね、日本、ドイツ、イタリアとくれば日独伊でしょうね。変だな、と思いこれを見てたら、「何だ、これ成績の3国同盟」じゃないのと、私は見てしまったんですけども。一方、アメリカ、イギリスは、ちょっと違うんですね、英米圏が違うんです。英米圏は3国同盟とは逆のパターンなんですよ、つまり学校間のね、差が小さいんですよ、もうどここの学校が良いといった地域差がないっていうかな、つまりエリート校とか何とかについてあんまり違いがない。もっとも、私学に関してはね、ご存じのようにエリート校っていうのはイギリスであれ、アメリカであれ、あるんですよ。けれど、全体を均(なら)していったときにはそういう差はないというところですね。絞って言えば、公立学校間格差ということです。ということで、これまでの報道とかあるいは、取り上げた結果というのは、例えばこんな風にね、年度別に設定しておいて、さらに評価領域を設けておいて、たとえば、「順位争いとして2位」とか何とか、言ってね比べている。こうしてみると、これまでの報道機関あるいは研究者の一部もこの手法に囚われてやってきた、ということですね。このやり方は今から見ればかなり古い手法ですので、決して無駄ではないんだけれども教育目的の本質論からすればどうなん

だろうか。方向としてかなり間違えていると言えるのではないかな。こういうことです。

ところで、先程の話は実はこれ(壇上の画面を指して)ですね、科学得点、この科学はサイエンス、理科です。ドイツとか日本、イタリア、オランダですか、台湾、香港と、学校間の格差の大きいところですよ。逆にこれらは学校内の分散は、小さくなる、ということね。むしろ、アメリカ、イギリスは逆に学校内の分散が大きいということで、成績の低い人から高い人までの開きの大きい格差のある学級集団だということです。で、フィンランドはこちらの方で、学校間の分散が小さいと言うことで、ほとんどね、生徒の学力が横並びに近いような学校が、並立している。これが特徴です。

3番目にね、これは先程説明したからいいですね。ドイツ、オランダ、日本の3国間の成績の散らばりですけども、それぞれかなり大きいですね。逆にその差の小さいのは、先程見せたように北欧のフィンランドとかスウェーデンで、ほとんど変わらないということです。ということで、このことをまとめてみると、世界一の高い得点国であるフィンランドは、学校間の総合成績の分散がもっとも小さい、でも、科目間ではかなりの差異があるということで、学校間の成績全体の同一性、教科間での相対的異質性がある、ということですね。

このように考えていきますと、学校の先生からの立場から見ますとどうなりますか、これ。これ一番、学校内(教室内)が異質ですから一番やりにくいでしょう。これに対応しなくちゃならない先生方ですから、指導力にかかる先生の資質と能力ってのは、そんじょそこの力では対応できない。かなり高度で柔軟性のある能力を持つ先生じゃないと、こういうような対応はできないということを意味しているわけですね。そのことを裏付けるデータがいっぱい、フィンランドには出てるんです。そこにはフィンランドで発信しているものもあるし、近隣諸国との交流の中で新たに開発したものもあるわけで世界的に一躍注目されたことがわかります。そこで、私はその誘惑に駆られて、フィンラン

ドへその原因、理由を探りに行って、色々な情報を集めてきたわけです。その結果、段々とフィンランドの教育に対する内容が分かってきたんです。それは、何が学力世界一の要因かの答えです、一言で言うと教師力です。これは他国と比べ、非常に高い。

先生になりたいっていうのはね、フィンランドでは若者にとって注目度一番の職業なんです。一番魅力がある職業、それが教師という職業です。だから、優秀な、しかも意欲のある人達がね、先生の職を奪うように来る。行政側もそれを知っており、先程、冒頭に言いましたけど、国の歴史がああいう形で悲惨な目を受けたのは、教育の力が弱かったからなんだ、という反省をしています。そして、その反省を込めて教育に大きな力を注がないと、武力を高めるだけでは国は起たない、ということで、国を挙げてね、教育の方に力を注ぐ方向で歩んできたのですね。その素晴らしい結果がこれなんです。で、話はちょっとズレますけど、教育の力は上がったんだけど、国力全体としてどうかというと、これも実は上がってるんです。ですからその方向も間違っていないんです。つまり国力は教育という一側面だけでなく、国の将来という眼で色々な角度から、バランスのとれた国民の資質向上をめざすべきなのです。従ってまあ、小さい貧困な国であればあるほど、活力はあっても武力の小さい国であればあるほど、教育の方にね、より大きな力を注がなくちゃいけないと識見が、事実として挙げられているというように私は思いますね。ということで、ここから本題に入って行きたいと思うんです。質的な検討を試みたいということで、ドキュメンタリー・フィールド・リサーチという、ネーミングにしました。で、話を元に戻します。PISA、つまりOECD Program for International Student Assessment、という項目がありますけども、このPISAの真の狙いとは何か、皆さんもう色々なところで目に触れていることもあると思います。これはそっくり、確認のために言うわけですが、この計画の狙いは、まあ経済協力開発機構によるもので、フランスに本部のあるところ

ですけどね、これからの人類社会はどのような方向を求めて歩くべきか、ということで、経済という視点からね、世界のあり方を議論した結果を出しているものです。それを教育の方で反映させようとして、彼らが取り組んだ。これがPISA型テストですね。

ここで狙ったのは何かと言うと、人類の現在未来に対する挑戦力の育成、つまり人類が、課せられている色々な課題があるわけです。現在課せられた、あるいは将来くるかもしれない課題があるんです。それに、挑戦しましょうということです。例えば地球温暖化という問題があります。これをどう、人類として対応したらよいかという挑戦力の育成、それを形式的あるいは数量的な処理だけじゃなくて、その中身を解釈していくことによって、どうそれをどんな点を育成するべきなのかという課題。それをどういう形で教育として実現して、目標達成しようとするのかというような、2つの視点からPISAの学力検査を世界的な規模で実施した動機であるということです。

で、今日ではどうかというと、人類がこれから生き永らえていくためには、次の3つの能力を持たなくちゃいけないということです。それは何かというと、1つは分析能力、2番目は推論能力、それから伝達能力の3つです。この3つを人類は、身につけなくちゃいけないということです。で、これを単なる1国という話ではなくて地球全体、未来志向の立場で、やっぴかないとこの先、地球温暖化の問題は1つの国、2つの国がちょこちょこ別々にやっても、片付く問題ではないということです。従って、我々もそういう人類が今求めている課題の輪の中に入っていく必要があるだろう。そういう観点では、PISAの考え方は非常に遠大な計画であるといえます。しかも規模が大きく、目の前のことで一転二転するという細かい心配りをする構想ではない、ということです。これからはそういう視野で我々が臨んでいかないと時代に遅れてしまうだろうということです。

とりわけ、まあ余計なお世話かもしれませんが、筑波大学では東京教育大学という、伝統の

流れを持っているわけですからそういうところをしっかりと見据えて取り組んでいかねばならないと言うことです。中でも一番強く課せられているのは筑波大学と広島大学かもしれないですね。他の大学でも頑張っている例がいっぱいありますけども、やはり先陣を切ってやるべき大学はどこかという、国内でまず頭に浮かぶのはこの2つの大学だろうと、私は見ているんです。従って、両大学で学び教えている皆様はそこに大きな誇りをもって、未来に臨んで欲しいなと、端から期待しているのです。その結論は置いておいて、何をそのために目指すかと言うと、やはり教育だということですよ。では、どんな教育かという、高品質でしかも公正な学習成果の提供であると。Providing talk in high quality and educating equipped with fair learning outcome. って書いてありますけどね。これを、提供すること。そういう教育を展開しなきゃいけないと思っているんですけどね。

実は、ご存じだと思いますけどPISAテストは、当初はね、わずか43カ国、全国家総数の4分の1強程度の参加でした。初回目が2000年で43カ国だったのが、2回、3回目、今年度で4回目になるんですけども40カ国の参加、最新の情報ですが、次回では62カ国まで増えるという予想です。ということで、まだまだ増える可能性はあるということですね。今回不参加の開発途上国はいっぱいあります。例えば、アフリカとかね、アジアの貧困な国も含めて、これ等の国々がどんどんこれに参加してくる時代になるだろうという予想です。ということで、世界の注目株はこの教育評価になるだろうということですね。

で、何というか我が国では当然なんですけど、アジア圏の多くは、小さい国が多く、まだ市街地から遠く外れた地域に住んでいる人々が多いせい、この面での視野がまだまだ狭いんですよ。ということで、今回のこの成績結果について、これらの国では自己には注目しても、他の方を見ない(或いは見られない)という寂しい印象を持っているわけです。けれども、そういう傾向があったなら、自国内での努力を中心

にして他国への協力も依頼しながら、この学力面での視野を広くし、しかもその内容面での高度化を図る自助努力と他者協力の両面の作用を活性化していく国際的協力が必要でしょうね。当然、その成績結果が良いのは結構ですけども、それが国及び国民の求める向上に果たして合致しているか、という問題点も同時にチェックしなければなりません。

で、1つは、一人一人のリテラシーが求められる。これは先程言ったように、生きる力に相当します。これを日本式で言ったら「生きる力」に入るんだと思うんですけど。「分析する、理由付けをする、訳を知る、それに、伝達し合える」といったことですかね。こういう力、これこそが生きる力だと思うんですけど、これを「生きる力」として育てることが求められている。まさに、日本で言われている「生きる力」と、この「リテラシー」って言うのはね、非常に近似した意味を持っているというように、考えておいたらよろしいのではないかとということです。

それでは、そのリテラシーって何なのか。もう少し砕いて、具体的に言いますと、次のような内容であると、私には思えます。これはあの、向こうの文献の中を探っていた時に見つかったものです。

1番目は、様々な文脈での印刷・記述資料を見分ける力ということで内的リテラシーを指し、理解する、あるいは解釈する、想像する、交換する、計算する、活用ができる、そういうことを、その印刷・記述資料を元にして展開できるということです。

2番目は、自己目標の実現のために、国内・国外を問わず、必要に応じてその社会或いは集団・個人に向けた企画に、広く深くきめ細かく参加し、交流をする力を育成する。この力が外的リテラシーです。色んな違った集団と交わること。このことから新しい刺激をお互いにやりとりしつつ、自己の目標実現のために吸収し、活用して持続的に学び続けていく。

3番目は、リテラシーに対する非リテラシーの必要性です。非リテラシーとは何だというと、これこそが問題なわけですね。上記の2つの条件

を満たしていないのが、非リテラシーになるので、したがって教育という外的力により自己の能力を高め、問題の解決からその目標の実現へと向かうべきだろう、ということです。これを言い換えれば、社会的な問題としても捉えられます。ということで、リテラシーというキーワードを元にして、こういう人たちの非リテラシーをできるだけ少なくするように、指導の展開をしていく必要があるだろうということです。

じゃあ、PISA 型で、測定しているものと測定されていない面があるようですけども何かというと、1つは、その応用的な学力観というものです。これは日本で言う学力観、基礎・基本という表現で、キーワードとして使われていますけども、それとは対立するものです。これはあの、一見相対するようなものですけども、相対するものではなくて、お互いに手を携える連携関係であるということで、どちらも大事だということです。日本は、こちらの方を中心にしてやっていますけれども、PISA 型は、応用的な学力観、例えば、「いたずら書き」の問題なんてよくご存知のはずですね。あれはまさに応用的な学力観ですよ。これらの両方を追求していかなくちゃいけないことだろうということです。

最後に、PISA 型学力の我が国に与えた影響として、他に何があるか。ユニークな定義を次に提示します。

読解力の定義；

これまでの我々の理解を崩しています。その定義によれば、読解力とは、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力、これを読解力と彼らは定義している。

教育の定義；

本国フィンランドの国の人の答えですが、教育とは明日の世界に備えること。子ども達にどんな将来を準備しているか、どんな知識や技能の需要に対応しなければならないか、こういったものについて、注目して対応策を考える。そして、生徒が自身の学習能力を自己認識することは学業成績に大きく影響することであり、極

めて重要である。生徒が自分自身を敗者だと認めるとその後の学習も日常の振る舞いも敗者のそれになることが多いということで、負け犬は負け犬の行動を取ってしまう。

落第制度と学校の自由度；

フィンランドの教育では、落第しても1年間で勉強する機会を、義務教育期間の最後にとっておくという制度がある。言い換えれば、これは9年間の義務教育の後にもう1年履修することができる期間がある。これも結局本人が駄目だという風に考えさせないで、立ち直りがあるんだよって言う挽回の機会を設けておく。なぜなら、義務教育の最後で取り返しにつくようにしていくと、その個人は国の流れに入っていくようになる。フィンランドの教育制度は何て奥が深く、未来志向の高い素晴らしい国なのか。ほれほれする。これがフィンランドの国民的強さ、教育の強さの秘密だと私は捉えています。

最後に、これが私の最終講義ですから、一応これで終わりにします。どうも、まとまりのないお話をだらだらと話したかもしれませんが、最後まで聞いていただいて心より感謝しております。また、3年半という短期間でしたが、こういう機会を与えて下さった本学関係の先生方及び事務等の方々、また、一緒に授業・ゼミなどで学ばせていただいた院生・学生の皆さま方、そして学内等で気軽にお付き合い戴いた皆様、どうもありがとうございます。本学が、国内外で益々名声を馳せるように期待いたしますと同時に、皆様方お一人お一人がお元気で毎日を過ごされることをお祈り申し上げます。